

ピアノ調律師 徳田堅輔さん 世田谷区喜多見「徳田ピアノサービス」を経営 横須賀出身 研修期間を加えるとピアノ調律師歴約35年の大ベテラン 今時の音楽はよく分からないが、クラシックにかけては少しうるさい 3人の男の子の父親



徳田さんは、ピアノのお医者さんである。毎日、1台約2時間位かけてピアノの音をよみがえらせる。

◆力強く張りのある音を支えているのは、純度の高い鋼鉄でできているミュージックワイヤー（弦）です。これは、普通に知られているピアノ線とは全く違うもので、1本の張力が何と最大90キロ、全部で230本、合わせると16トンにもなります。これだけの張力に耐えるワイヤーでないと、張りのある豊かな音色をだすことはできません。

木製のピアノケースの中の230本の鉄ワイヤーとそれを支える頑丈な鉄板と鉄骨が確かな音をつくりだす。でも、これほど強いワイヤーにもやはり泣きどころはある。

◆「錆びない鉄」があれば、ワイヤーには最適だと思いますね。日本は湿度が高いし、特に暖房が入る冬は、ワイヤーにとって悪条件が重なります。手入れが行き届いていないとワイヤーは正直ですから、すぐに錆び付いてきます。もちろん、ステンレス製にしたり、表面にメッキしたりすることはできるでしょうが、音が格段に変わってしまうんですね。

鉄の細やかな振動が、微妙な音の違いを生み出す。だからこそ、鉄の地肌が大事なのだ。エッ、地肌でいけないところもある？

◆鉄は鍵盤には不向きですね。感触が冷たく、堅い。汗も吸い取りません。これらを克服するような鉄が発明された

・・・ピアノに響く夢・ロマン・・・

心に呼びかけてくる鋼鉄の弦

ら、丈夫な鍵盤になると思いますよ。昔は象牙を鍵盤に使ってました。表面のなめらかな感触は象牙ならではのものです。鉄にも、あの暖かさがあるといいですね。

鉄と木とフェルトでできているピアノ。約300年前にイタリアで生まれ、以来たくさんの人たちの心を和ませてきた。外からは見えないけれど、中からしっかり支えている鉄があればこそ、これからもずっと美しい音色を奏でるだろう。そんなピアノの「緑の下の力持ち」が徳田さん。

◆機械で調律することもできます。でもね、人が聞いて心に響く心地良い音色は、やはり人の手によらないと出せないと思っています。1本のワイヤーが私の心に呼びかける音を、全身で受けとめてあげるんですよ。1本1本の鉄のワイヤーが、皆生きてるんですね。

築家の夢・ロマン・・・

文化を咲かせましょう

坂上直哉さん

調布と葉山にアトリエを持ち、アートワーク「空」を主宰 学生時代にステンレスと出会い、昭和48年、日新製鋼(株)と“ステンレスにより絵を描く”発想を基本としたテクノロジー研究開発をスタート 東京国際空港(羽田)ロビーの『虹にむかって』『虹にそまって』を始め、ステンレスの新しい世界を表現したたくさん作品がある



うな印象を受けますね。ヨーロッパで強く感じたのですが、駅やいろいろな公共物に鉄そのものが意匠化されて結構使われているんです。実に構造的かつ美しい装飾になっていて、人間生活を豊かにする可能性を持つ“道具”として機能しています。実際には日本にも結構あるんですが、どう

もモダン建築という世界の中に鉄の持つ機能的良さが隠されてしまっているように思えます。

坂上 日本の場合は工芸的な世界から、一気に近代の工業生産の時代へ、大量生産の世界に飛躍していった。ところが欧州ではコツコツと近代化の過程を歩みながら、鉄もその機能を熟成させ、文化性を育ててきている。そこら辺の歴史的な風土の違いがあるのかな。

鈴木 日本では身近な存在のものがどんどん消えていって感じるようになって…。鉄への期待は、ひとつはこれからもっとスパンが拡大して超々高層ビルなどの世界が切り開いていかれることを期待していますが、一方で、もっと身近な存在のもの、クラフト的なものをもっと大事にしていきたいですね。私たち、設計者は自分で直接物を造る立場ではないこともあって、職人芸的なものにもっと多く接し、鉄を良く理解している人達と組んで仕事をしていきたいと思っています。

坂上 鉄が風景の中で何を提案していこうとしているのか。設計を考える人達のことを鉄鋼メーカーはもっと深く考え、双方のコミュニケーションやネットワークをもっと強化していくことが課題ではないでしょうか。

でも普通鋼は少しずつ錆びて私と一緒に年をとっていつくくれますが、ステンレスはなかなか自分と一緒に年をとってくれません(笑)。そこがまた魅力ですが。